慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学に於ける過剰人口論の不可能
Sub Title	
Author	竹村, 豊太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.11 (1927. 11) ,p.1561(131)- 1592(162)
JaLC DOI	10.14991/001.19271101-0131
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19271101-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

傭主が何れも綿花の騰貴に苦しみ賃銀の減額によりて利潤を擁護するの已むを得なかつたのであり、ストライキは數日中に失敗を語げ、首謀者の外總て減額せる賃銀にて復職した。（Commons, pp. 418-423; Perlman, pp. 23-25; Carlton, Organized Labour, p. 25）（完）

（昭和二年十月二十二日稿）

經濟學に於ける過剰人口論の不可能

竹村豐太郎

—靜的人口過剰觀の不可能
—動的人口過剰觀と其非現實的觀察の無意味
—人口過剰の事實の可能
—過剰人口論の不可能

靜的人口過剰觀の不可能

人口は經濟學に於ける研究の對象として種々に取扱はれて居るが、過剰人口論を起らしめる取扱ひ方はそれを欲望の主體としてその目的物たる財一般に對立せしめるにある。人口は總欲望構成の因數であり、從つてしばらく他の構成要素、即ち他の因數、即ち生活程度の變動によつて攪亂されない限り、人口の增減は總欲望の增減の形に於て財一般との間の關係を變動することによつて欲望滿足の程度に影響を與へ、この關係に於てはじめて經濟學に於ける研究對象となる。

欲望は經濟學の重要な入口ではあるがそれ自身は一の心理現象であつて心理學の研究對象である

やうに、人口の本質、增減それ自身は社會學、統計學乃至生理學の問題であつて經濟學の問題とはならない。欲望が經濟學に於ける研究の一題目であるのはそれが充足を豫定せられその充足の材料たる財との經濟的關係に於て考へられるからである。人口も亦少くとも、一定の經濟條件（一定の生產分配の技術制度）によつて規定せられる一定の經濟力との經濟的關係に於て考へられる時から以後でなくては經濟學の問題とはなり得ない。故に經濟學に於ては人口の大小そのものは問題にならず、大小如何にかゝわらず人口の扶養、人口の貧富が問題になる。經濟學の直接の對象たる經濟生活は欲望充足を目標とすると同じ意味で人口の生活を可能ならしめることを以て目標とする。目標であるが故に、從つて其の當然なる達成は努力せられ、非當なる不達成は虞れられ、避けられ、問題化せられる。其の達成とは經濟力が人口によつて構成せられた總欲望に充分であるを謂ひ、不達成とはそれが不充分であるを謂ふ。目標の不成達は總欲望が過大である爲だとも、經濟力が過少である爲だとも云へ、何れと云つても要するに一つことである。この不達成は總欲望の縮少によつて防止或は矯正せられ、欲望の縮少は人口の減少によつて行はれ得るから、この立場から觀察すれば、人口過剰なる現象と謂ふことが出來る。

人口數だけを考へたのでは人口過剰問題と云ふが如き經濟學上の問題は起らない。經濟學以外の問題として人口過剰問題が考へられなかつたと云ふのではない。即ち自然科學的（空間　生活資料を給すべき物質の存在量、の如き物理學的、化學的）制限と對立して考へれば考へられる。然しこれは今日までも近き將來にも、そして多分人口の成員たる人類が文化の主體であるに於ては永遠に問題とならないであらう。だから單なる人口統計數字では過剰人口問題の存否を知ることは出來ない。日本に人口の多きこと並に人口增加の激しいことはそれ自身だけでは、濠洲に人口が稀少でフランスに人口增加が停止し或は停止せんとしつゝあることと同樣、過剰人口問題を提起しないであらう。かやうに書いて見れば單なる人口統計數字で過剰人口問題を考へるが如き非理は不可能のやうに思はれるが、この多分ありさうに思はれない統計數字の生んだ遊離概念的の人口論意識が豫期よりは一層屢々抱かれるのを日常に經驗するのを反省して警戒することは不要ではあるまい。最近數年來我國に於て人口問題が「重大になつた」と考へられつゝあるのは統計數字が齎らした緊張である。我國現下人口問題の取扱ひ方の多くが人口統計民衆化のきゝすぎと人口論の失敗を示唆する。その實例は枚擧するまでもなからう。

以上の如き遊離概念的人口論の危險は一國の人口をそのまゝ材料にする場合よりは更にその密度を材料にする場合の方が尠いやうではあるが、依然として去らない。密度を計算する除數となる土地面積は確かに經濟力を決定する要件の一つではあるが、甚だ消極的な一つであるに過ぎない。從つて他のより遙かに重要な諸要件を顧慮せずにたゞ自然の與件の幾何學的概念だけを取つてこれと人口との比率を算出したところで、それがそのまゝでは人口論的には何の意味をも持たないこと明かである。であるから我國の稠密な人口、更により稠密な西歐諸國の人口も、人口稀薄な一部農業國未開國の人口も、それ〴〵の條件によつて起される過剰の可能なるに於ては同等である。密度の計算を如何に改めてもそれによつて直接的な人口論的暗示を索めんとするは木に緣つて魚を求むる

よりも果敢ない。たとへば人口密度が從來のやうに各國の土地の總面積に對する人口の比率として計算されることを不可とし、領土面積によらず、その國の耕地面積の單位當り何人とすべきことが提唱されて居るが、そのことの合理的なるにもかゝわらず、これも亦人口密度の數字だけで人口過剰を觀察することの危險さを救濟しない。從來の計算によれば各國の人口密度はベルギーを第一とし、オランダ、イギリス、イタリア、ドイツ近接して相次ぎ、日本は六位にあつたが、この計算によれば日本は各國に隔絶して第一位（註一）であることが知られても、この順位だけを見て人口過剰がより多くベルギー、オランダにありや、日本にありやを決定しない。それは人口過剰が甚しく商工的である人口と耕地との比率であるがゆえに當然に高くある密度の場合に於て必ずしも發生し、甚しく農牧的である人口と耕地との比率であるが故に當然に低くある密度の場合に於て必ずしも發生せざることを決定しないと同樣（註二）、密度常に高き都會と密度常に低き農村との何れに人口過剰ありやを概括し得ないと同樣、更に、ニウヨークが其第十區が世界第一の人口稠密地區として一エーカーに六二七人（一九一四年調）の居住者を算し、これに比すれば歐洲に於ては最稠密地區として有名なるプラークのヨゼフシタットに四八五人、パリのボンヌヌウヱルに四三四人、ロンドンのベスナルグリン北區に三六五の居住者を報告するの故を以て、ニウヨークをこれらの歐洲都市よりも人口過剰なりとし、殊に米國を歐洲各國よりも人口過剰なりと斷じ能はないと同樣である。

（註一）大正十二年調査、各國の土地總面積による人口密度、一平方里當り人口數次の如し。

ベルギー	三、九〇九	ドイツ	二、〇七四
オランダ	三、二三九	日本	一、七五一
イギリス	二、三一三	スイス	一、四四九
イタリー	二、〇九〇	フランス	一、〇九八

しかるに各國の耕地面によつて一平方キロメートル當りの人口數を算出した人口密度によれば、次の如き順位の變動が起る。

日本	九六九	イギリス	二二六
ベルギー	三九四	ドイツ	一八五
イタリー	三〇五	スイス	一六八
オランダ	二七三	フランス	一〇八

（「ダイアモンド」、大正十五年二月二十一日發行二一頁、清水敎授稿「人口問題と其對策」中の引用より）

（註二）清水敎授は、例へば、かゝる密度の故に「斯樣な狀態だから我國の人口と職業の不調和は益々甚だしく、たまゝ職業を得ても、諸外國の勞働者に比較して、餘計に働いて少く得るといふ結果になるのである（同上頁）。

人口過剰とは人口と經濟力との相對的關係に於て、人口が經濟力に對して過剰であり、即ち經濟が人口に對して過少であつてはじめて云はれる。人口が經濟力に對して過剰であるとは何を意味するか。人口が過剰であるとは即ち其人口が生存しつゝある爲に生ずる物質的欲望の總量が過剰であることを意味し、これが經濟力に對して過剰であるとは經濟力がこれを充分に滿足せしめるだけに有力でないことを意味する。然らば、人口過剰とは欲望滿足不充分の狀態であることになる。しかし

ながら欲望滿足不充分の狀態は直に人口過剰を意味するか。

貧乏と稱せられる生活困難の狀態の存在を以て人口過剰の表示なりとする意見はこの質問に肯定を以て答へるに類する。何となれば生活困難とは、時に生存困難をさへ含めて、要するに欲望滿足不充分だからである。人口過剰の表示として、單に人口數を指摘する程單純でなくても、又人口密度を指示する程淺慮でなくても、この生活困難なる事實を擧げる位の輕卒は夥しく見出される歷史的に著名の例として、マルサス說信奉者はマルサス人口論を以て過剰人口論なりと概念化し、これに貧乏と稱せられる生活困難が歷史的に常在の社會現象なるの觀念を新に接合し、マルサスの人口原理の歷史的妥當性を貧乏の歷史的妥當性によつて、證明せんとするところの態度を採ることによつて、生活困難即ち欲望滿足不充分の狀態が直に人口過剰を意味するの斷定に陷ることに慣れて來た。Thornton は定義して「人口過剰とは住民の幾部分でもが勞働の能力と意志あるにもかゝわらず生活必需品を充分に獲得すること永續的に能はないある國の狀態を云ふ」（Overpopulation and Its Remedy, London 1846, p. 1）と云ひ、故に人口過剰の徵候として英國勞働階級の當時の生活困難の事實を指摘し、人口過剰の事實の研究は勞銀の研究を出ずること多からずとなす（同書第二章第三章）。今日英國の新マルサス主義者が其人口政策たる姙娠調節を主張する爲に人口過剰の常在を說明するに當つて、又この亞流たることを告白する。米國に於ては多數の勞働者が自家用の自動車で工場に通勤する。米國民がより貧しい生活に甘んじつゝあるあらゆる國民より勤勉であるか。例へばかの勤勉なるベルギーの農民にまさつて勤勉であるか。全く然らず、然も二人の米國農民の勞働收穫は五人のベルギー農民のそれに等しい。唯一の說明はベルギーは土地狹く米國は土地が廣いことにある。人口がより稠密ならば常により貧しくある。國民の經濟的困難の問題は主として人口過剰の問題である（マルサス協會機關紙 New Generation. December 1925, pp. 133-4 社說）と。千九百二十五年三月ニウヨークで催された The Six International Neo-Malthusian and Birth Control Conference では Dr. Henry P. Fairchild（紐育大學社會學教授）は人口過剰は人口が過多な爲現實の諸條件の下では最高可能な生活程度を實現すること能はざる時に起ると定義した（The Six International Neo-Malthusian and Birth Control Conference. Volume II., Problems of Overpopulation, ed. Margaret Sanger, p. 33）。

貧乏と稱せられる生活困難の概念がもしもその中に含まれてある生存困難なる生理學的事實のみを內容とするならば、貧乏は人口過剰の徵候であると云ふ上述の立言は其意味の範圍を狹められなければならない。マルサスも既にこれを窮極的過剰と呼んで「實際の饑饉といふ場合を除けば、決して直接に人口に影響するものではない」（佐久間氏譯マルサス人口理論、一三頁）として論外に取扱つた。ラウントリ、（ローントリと讀むは誤り、例、賀川豐彥氏著貧民心理之研究十二頁）ブースの諸條件の下では最高可能な生活程度を實現することの出來る生活を標準としてこの以下にあるものを以て貧乏と見做すこと（B. Seebohm Rowntree: A Study of Town Life, London 1900, pp. 53, 17-t）は、貧乏なる概念にある一定の明確な範圍を設けた點に於ては記憶すべき貢獻ではあつたけれども、これ畢竟するに社會現象たる貧乏に對する一の自然科學的觀察による任意の便宜的標準た

るばかりか、殊にこの場合には何等の助けとならない（註）。何故ならばかゝる意味に於ける貧乏は自動車の常用や最高可能な生活程度とは直接に關係しないからである。貧乏の終局は生理的事實ではあるが最も通常には心理的事實である。人は餓えるが故に貧乏であるより遙に通常に欲して得られざるが爲に貧乏である。より切實に云へば、ある社會階級は、以前と同じく或は以前から見るとより多くの品物を獲得することが出來るやうになつたのにもかゝわらず、もしも新たな財が欲望せられしかも獲得出來ないならば、却つてより貧乏になつたと考へるかも知れない。比較對照は貧乏の一大要件である。貧乏についての多くの定義に追加して、この歷史的定義を主張することが出來る――各時期において欲望せられて居る新たな財の享樂不能、これ（MacGregor: Evolution of Industry, London, p. 13-4）。貧乏とは即ち欲望滿足不充分である。

（註）我國でも屢々社會統計資料作製に當つてこれらの便宜的標準が考案されて來た。大正十年社會局によつて行はれた細民生計調査にもそれがある（細民生計調査、大正十五年再刊、一頁）。東京市社會局が大正十五年六月に發表した細民標準線及准細民線については記憶が新しいであらう。

貧乏なる概念の內容は實際は相對的であり從つて漠然且廣汎である。人口過剩の徵候として指示されながら實はそれ自身茫漠として居る。しかし貧乏を以て假に欲望滿足不充分なりと解釋するとして、欲望滿足不充分を以て必然的に人口過剩の徵候なりとするには多大の困難が伴ふ。

人口過剩は人口適數に對立してはじめて考へられる。後者あるが故に前者があり、しかも前者は常に後者を目標においてこれに歸らんとする。前者の解決の方向は後者にある。人口適數なる事實は人口過剩のそれと同樣理論上だけでも可能であるべきである。しかしもしも人口過剩が欲望滿足不充分であるならばその解決は經濟學の以外に求めなければならない。何故ならば欲望の累增性の示すやうに各人の欲望の總和殊にある人口の即ち社會欲望の總和は、理想が現實に對するやうに、絕對が相對に對するやうに、全ての精神的なるものが物質的なるものに對するやうに、一般にはほとんど常に、これに滿足を與へる經濟力に對して壓倒的過剩にあるからである。經驗的に人口は殆んど常にその欲望の總和に於て不滿の狀態にあり、隴を得て復た蜀を望みつゝある。これを問題として解釋するとは、かゝる狀態を永續的に除去することの可能、即ち累增してやまざるべき欲望の社會的持續的滿足の普遍的可能を意味する。われ〳〵の經驗及學問的認識はこの可能に深い疑惑を投げる。それよりもさきにそれは經濟學の認識外に屬する。物質的欲望滿足を批判なしに肯定し、これを絕對のアプリオリとし、これより出發しその充足を目標とする行爲計畫の組織を通して人間の生活を考察する經濟學に於ては問題とはなり得ない筈である。

かくの如く人口過剩問題は大別して二種の取扱ひ方の下に不適當に考へられる危險を持つて來た。第一は、其の徵候を人口數或は密度なる純然たる數的觀念に求め、或はこれを人口の總慾望の量と經濟力との關係に求めながらもその慾望量を生理的規準によつて決定し、何れの場合にも、かゝる社會現象における問題の經濟學的認識の爲に自然科學的方法を基本とした方法上の不適當である。第二は、その徵候を人口の總慾望と經濟力との關係に求め、且つ前者を決定するに當つて何等自然科學的方法を用ひなかつたが、却つて總慾望なる概念の經濟學的意義を喪失し、これを特殊化すること

をも怠つた爲、兩者の關係が經濟學的に無意味となり、從つて問題解決の目標をして不可能ならしめた、準備概念の不適當である。正しい人口過剰の觀念を把握する前にこれらの屢〻種々な假面の下に行はれる謬說の性質をよく理解しておく必要がある。

動的人口過剰觀と其非現實的觀察の無意味

人口が過剰であると云ふのは、ある人口が存續しつゝある爲に生ずる物質的欲望がこれを滿足せしむる立場にある經濟力に對して過大であると云ふが如き靜的な絕對的な關係についてではない。それは、ある人口の增加が、その存續を可能ならしめる爲に從來からあつた或はそれ以上の物質的欲望の總量の增加が從來の程度或はそれ以上に滿足を得ることが出來る程充分に、經濟力の增進をも伴はない場合の如き動的な相對的な關係についてである。換言すれば人口增加がその欲望と對立する經濟力の增進以外に速かであることである。又それは增加した人口の側から相對的に觀察すれば經濟力の不足、從つてそれに結果する欲望滿足不充分感即ち缺乏感の增大、生活程度の低下となる。その觀察は同一の人口について、習熟の生活程度なる一定の總慾望量について、二つの時間に亘つて行はれる歷史的比較の方法をとる。それ〴〵の時間に於て人口を成立せしめる、或は人口から結果する、一切の事情は考慮の外に置かれる。故に靜的に見てはある人口がより豐富に財を享有し、より充分に滿足を得つゝあつてさへも、同じく靜的に見てはより少く豐富に財を享有し、より不充分に滿足を感じつゝある他の人口よりも、より甚しく人口過剰に遭遇しつゝありやも知れない。或は後者が少しも、それに遭遇して居ないのに前者のみが遭遇しつゝありやさへも知れない。人口過剰とは靜的に見た財の供給缺乏不足ではなく、以前に比してのその減少である。其體的には生活程度の低下である。その高低の狀態、程度そのものではない。

マルサスは其人口論の公式的叙述に於て明にこのことを述べた　人口と食料と二つのものの間に等比が如何に必然的なりやを描いた。彼が救貧法を非難したのは「必要な食物を增加せしめずして人口を增加せしめる」（佐久間氏、第七版譯、一三〇頁、高野、大內氏、第一版譯七七頁）からであつた。マルサスの採つた方法は經濟學としての人口論にとつて正當なるものであつた。彼の憂へたのは人口數の夥大ではなく、食料增加の速度より速かな人口增加の速度、從つて其結果たる生活程度の低落であつた。マルサス說をドイツに有力ならしめるに功績の著しかつた Rümelin はこの觀點を更に力强く記して云ふ。

持續的に、即ち年來打　〻いて住民數が國民所得及國民財產よりも急激に增加したる場合、其結果として個人當りの所得が減少する場合、國民經濟的各種職業は從事する者過多にして競爭の爲に狹められ其結果大多數に對して相當なる利得を與へず、新に人口增加ある每にこの弊を擴大するに到る場合、國土の面積がもはや住民に一般必需の食料及生活資料を供給するに充分ならず、外國よりの仕入が其製造及販賣が愈々困難を增さしめらるゝが如き商品の反對給付を要求する時、即ち國民財產及國民所得の增加が漸次不可能となるが如き場合、一國は過剰人口の狀態に入れりと云ふ（Rümelin: Reden und Aufsätze, N. F., S. 569）。

同樣にドイツに於けるマルサス學說の正統繼承者として常在的過剰人口說を細說するワグナーも

亦云ふ。過剰人口は

人口、殊に其の勞働階級が、營利行爲に對する充分なる好意と能力とにもかゝわらず、安全且充分なる活用と利得とを見出さず、しかも次の三個の事情を規準にして考へられる時、起る。即ち第一、生產についての一定の經濟技術的關係、殊に生產物の販賣及價格に對する諸條件乃至必需品の仕入及價格に對する諸條件を規準とし、第二、生產及分配に對する一定の法律制度を規準とし、第三、既得の生活程度を根據として定めらるゝ欲望滿足の種類程度及快感に關すると同樣勞働の種類程度及苦痛感に關して生じた要求を規準とすることこれである（Wagner: Grundlagen der politischen Oekonomie, 3. Aufl., Leipzig 1893, I. Teil, 2. Halbb., S. 58）。

この考へ方による人口過剰はそれ自身の數乃至は土地面積に相對しての密度でなく、物資に相對しての觀念であり、物資とは自然に規定されて存在するまゝの物質又は力でなく、かゝる物質又は力を終局の目的とする經濟條件の有機的一體、こゝに經濟力と稱するところのもの(註)である。そしてその過剰であると云はれるについての基準は何等絕對的に與へられ客觀的に存在するものでなく、偶然な其時の「慣熟の」生活程度々支持する爲の兩者の相對的狀態である。その基準は偶然の存在ではあるけれども確實且必然に存在する。即ちある一定の社會單位における經濟力に對立させられる總慾望の個人當り平均がある觀察時點に到るまで引續いて現實に滿足を得て來たまゝを基準とするからその認識は常に即時に可能である。從つてこのやうに考へられた人口過剰なるものは一の明かな特殊現象として、過剰ならざる他の現象から區別して觀察され得る。明かに區別して認められ得る現象にしてはじめて問題となることが出來る。

（註）マルサスですら其所謂 means of subsistence が國內の農產物のみによるのでないことを明言する程充分に商工業に屢々注意を拂つた。物資を人口との經濟的の關係に於て最も直接なものに言ひ直せば勞働に對する充分なる報酬の可能、Mombert はこれを「充分なる且報酬多き勞働の機會」と稱した。曰く「世界經濟の時代には適勞年齡階級を增加せしむが如き人口增加ならばこれに充分なる且有利なる勞働機會を與ふるに缺かざる限り、人口の過多はあり得べからず。飢餓を忍ばねばならない人々のあることは糧食の缺乏の爲でなく不足なもしくは報酬不充分な勞働機會の結果として必要な食を購ふべき貨幣の缺乏の爲である」。（Mombert: Bevölkerungspolitik nach dem Kriege, Tübingen 1916, S. 28）

人口過剰は何れも可變的要件たる經濟力と人口との關係の中に時間的に發生するから、其原因は兩者何れかの變化によると兩者共の變化によるとを問はず、兩者の變化を原因として發生する。人口過剰は經濟力より速かなる人口の增加により、及人口より緩慢なる經濟力の增加により、發生する。人口の增加がなく、或は人口が減少する時さへも、經濟力が減少し或は其減少の度が人口それよりも激しいならば、又人口過剰が發生する。故にある社會單位に於てその經濟力を構成する要件の一部又は全てが引續いて惡化し、或は今までは均衡を保つて來た經濟的諸要件が新たに發生した異常な外部的事情に順應することが出來ず從つて今までは當然であつた能力が減退した爲に、人口の個人當りの平均所得が減少する時、たとへば、政治的經濟的變革、戰亂、天災、によつて人口過剩が發生する。歐洲大戰後各交戰國に於て多少ともに人口增加が抑制せられ或は減少さへしたにもかゝわらず人口過剩の危險が虞れられた(Mombert: Die Gefahr einer Übervölkerung für Deutschland, Tübingen 1919)。平和時代には適量と考へられた人口數乃至其增加が戰爭なる異常な外部的事情の

勃發によつて過剰人口の狀態に入つたと考へられ、食料原料等の農產物の世界經濟的需給關係の下に適量であつた人口數乃至其增加が自給經濟の下に於ては過剰であると云ふことは最もありうべきことであらう。

然し、かく云ふことが許されるからと云つて、現在の適量の人口を支持する爲に必ずあらねばならぬ諸條件が變動することによつて當然その人口が過剰となるであらうとの可能が直に、その人口が現在過剰であることを表示すると云ふのは、かゝる變動が如何に近接し又は必然であつても、事實と可能との甚しき混同である。かゝる混同によつて生れた過剰人口觀は、こゝに一應例示せられ批評整理されておくことが正しい考へを持つ上に有用であると思はれる程屢々行はれる。我國が主要食料品が自給されない狀態に入つたことを以て人口過剰の徵候なりとし、或は耕地擴張、或は海外移民を奬勵することは久しく聞かれて來た。これ第一に戰時の自給を豫想し、第二に農產國の將來に於ける工業化及農產物自用を豫想するからである。同じ論法を以てすれば過剰人口は文明國到る處にある「自然の供給する資源涵渴の可能は多くの場合甚だ遠からずにある。多くの國に於ては利用し得る資源はすでに極度にまで利用され今後の餘裕甚だ尠いと云つてよいであらう。或る國では人口は既に過剰であるかも知れない。即ち現在の人口が其國土の資源によつて自らを養ふことが出來ないことである。英國はこの意味に於て人口過多である。食料生產の關する限りこの事は一般に承認されて居る」(H. old Cox: The Problem of Population, London 1922, p. 36)。それは只に我國及英國についてのみではない。「ヨーロッパの全ての工業國は人口過剰にある。換言すればこれらの國は其國土が扶養することの出來るより多くの住民を有するが故に糧食購入の爲に他の國民の爲に勞働することを餘儀なくされてある」。(Schalk: Der Wettkampf der Völker, Jena 1905, S. 53)。そしてかやうに解釋せられた過剰人口が何等の說明もなしに基本觀念として用ひられ直に概括論が行はれる時にかの屢〻人をして當惑せしむる立言——住民の平均的生活程度は低下せず或は上進さへしたが人口過剰は依然としてある、とのことが事實らしく、又眞理を持つやうに見える。

今日の國民經濟の本相はより多く戰時の孤立的な經濟であるか、平時の國際經濟であるかは、交戰狀態と交易狀態との何れが少くとも經濟的なるものの本質に一般により近くあるか、と同じやうに回答するまでもない明瞭すぎる問題である。國際間の紛爭が時に武力によつて解決されなければならないで來た今日の文明の程度に於ては經濟的には外國貿易によつて受けつゝある利得の程度は戰時に於て蒙るであらうところの損失に比例する。ある國民經濟がより多く世界經濟的になることはそれだけ多く損失を招く可能性を持つことになる。そしてこの危險の可能性を持たざらん爲に孤立經濟に留るよりはこの可能性を顧慮し計算しつゝも尙國際經濟を行ふ方が有利であるとの各國の考慮、計算並に經驗が今日の國際經濟を齎らすやうに敎へたと云つてよい。この意味における國際經濟は今日の各國に於て現在だけの人口を扶養する爲の經濟力の要件として確實に存在する。この確實に存在するものを一の要件としてはじめて成立するに到つた經濟力と一定の關係に於てのみ現存することが可能な人口について、それが過剰なりや或は從つて時に適量なりやを判斷せんとする時に、この重要なる一要件を置換へて而して其結果を以て置換へない以前の場合に起るものである

かの如く混同して考へることは明に判斷の法則に悖ると云はなければならない。

カナダとアルヘンチナが自給工業國となり農産物自用國となる時、今日のまゝの人口では英國は人口過剩となるかも知れない。然し必ずさうなると云ふのは許されない。第一にそれは人口が經濟力の變動に支配されて多分其增加を緩急にし、或は中止し、或は減少すらするであらうことを忘れて居る。第二にそれは別に新な條件が發生して其效果を攪亂して人口過剩なからしめんとするかも知れないことを全く無視して居る。かゝる一方のみを見た豫言は學問の範圍内では容れられない。しかし、假にそれが平時に適當な人口が戰時に咄嗟の爲に過剩となるとの如き比較的確實な場合の如く確實に云はれ得るやうな事情の下に於てなされたとしても、この故を以て現在の人口を過剩なりとすることは誤りである。現在の人口が適量である爲には不可缺な要件を取除いて考へるならば不適量は必然であり、人口過剩は單に英國ばかりにでなくカナダにもアルヘンチナにもあると云ふことが出來るであらうし、結局人口は到る處必ず常に過剩たるのみ、人口とは即ち過剩人口、從つて、人口過剩は今日社會問題經濟問題として人類の前途に暗雲を漂はして居る意味での特殊な深刻な問題ではなくなるであらう。

經濟學で直接問題とするのは人口と經濟力との現實のまゝの關係であつて、この關係に於て人口が適量にあることを目標とし過剩であることを問題とする。勿論、この關係の現狀が變轉して未來に於て別の狀態に到達すべしと推測せられるならば、これを實現せしめ或は防遏せんが爲にその經路を論じ施設を講ずることは、經濟行爲の計畫的意識的たる所以として、當然である。たゞそれは現狀の批判とは別であつて、如何に確的に又如何に近き將來に人口過剩が發生しやうとも又如何に其警告が有益であらうとも、その故を以て現在の人口が過剩であると云ふのは當らない。人口過剩が發生するであらうことゝ發生して居ることゝは別であるやうに。

人口過剩とはある國民經濟内の全人口が平均して從來慣熟の代償によつては從來慣熟の物質的欲望の滿足を行ふことが出來ないで居る現實の狀態を云ふ。

經濟學で正統派と稱せられ最も重要なる地位を占める學派は人口は本質的に過剩する傾向を持つとの人口過剩論をその傳承學說として主張して來た。以上の如く解せられた人口過剩なるものの傾向が人口の特殊態でなくして本態、病態でなくて常態なりとすることは經濟學に於て何を意味し、又如何にして可能であるか。

人口過剩の事實の可能

經濟行爲は嘗て經濟原則と稱せられた合理原則、即ち最小の犧牲によつて最大の效果を獲得せんとするの主義によつて指導される。しかし犧牲のうちの最小なものとして失つたものが效果のうちの最大なものとして獲得したものより必ずしもより小さいと云ふことは出來ない、或は等しくあるかも知れないし、又却つてより大であるかも知れない。これは等しく合理原則によつて指導されて營まれた經濟行爲でありながら、場合の異なるに從つて、或は效果が犧牲より大なることがあり、或はより小なることがあり、或は兩者が等しいことがあり、即ち差引して計算すれば或は利益を得或は損失を蒙り或は損益なきことがあること、日常身邊の見聞によつても明かではある。而して犧

牲が效果と等しい經濟行爲が行はれる場合にはかゝる行爲が連續さるゝ限りにおいて其主體の富の支配量は恒に等しいまゝに留り、又犧牲が效果より大である場合には其期間彼の富の支配量は恒に減少すべく、更に又、これと反對に犧牲が效果より小ならば其期間彼の富の支配量は恒に增加するであらう。

かく全く反對の異なる結果を生む種々の場合は事實として起る。而して科學はその智識の組織體系たるの本質のゆえに無數個々雜多の事實をそれ自身の規範によつて選擇し且これを觀察する。從つてある科學の規範に關係する多くの事實は消極的に即ち背理としてか、積極的に即ち合理としてか、で關係する。經濟學が一の文化科學として文化價値なる綜合的な目的を成就せんが爲にその特殊なる一面としての經濟價値の獲得を意志し或はその喪失忌避を意志するに於て成立する以上、經濟行爲に於ける犧牲と效果との比較上種々に起る場合のうち經濟學としての本態は犧牲が效果より小であることに於てあらねばならぬ。經濟學が文化科學として考へられる限り其の對象となる經濟行爲の積極的意義は單に合理法則に指導されると云ふばかりでなく、更に進んで最も多くより少なる犧牲によつて最も多くより大なる效果を獲得すること、即ち最大の餘剰價値獲得、を目標とするにあると云はれねばならぬ。之を反對に云へば、最大の餘剰價値獲得は人類の文化意志發現成就の一面であつて經濟行爲がこれを目標とするが故に、經濟を以て其認識對象とする經濟學が文化科學たり得るのである。故に經濟行爲が、經濟學的に考へて本態たる事情の起生及その本態的連續であるならば、其の結果は富の減少ではあり得ない。富の減少は、經濟學的に考へて本態ならざる、合理ならざる、事情の起生及かゝる連續として行はれた經濟行爲の結果起る。苟しくもそれが意識行爲であるならば、それを起さしめた意志は經濟學的判斷において錯誤を犯しもしくは經濟行爲の目標を無視したかによつて、何れにしても、反經濟學的行爲であり、學問的には過失もしくは反逆である。そしてこれをもし經濟學に於て取扱はうとするならば、かゝる背理としての消極的意義に於てであらねばならぬ。

經濟學は當然であるところの其積極的な認識構成によつて富の增加に關する諸現象の性質及關係を叙述する。其の消極的な部面の叙述は同時にこれの消極的反推による反對概念によつてこれを裏付け且これをより明確にし支持するが爲に準備されてあるばかりである。

經濟學に於て人口が問題の材料となるのはそれが經濟行爲の主體たる爲であり、そして然るのみであり、從つてこの場合人口は經濟行爲者集團として常に餘剰價値獲得を、而して出來るならば最大の餘剰價値獲得を遂げつゝあるを以て本態とする。かゝる本態が時に中斷されることはあつても猶其實現が事實として可能であつて來、又可能であるであらうが故にはじめて、人口を其組織の中心點とする經濟、の學たる經濟が今日の成立する如き內容を以て成立することが出來るのである。最大のと云はずとも苟くも單に餘剰價値獲得をさへ遂げつゝある限りの人口の支配する富の總量が減少することは、絕對にあり得ない。富の總量が減少しないならば、生活程度降下を意味する人口過剰現象は、人口增加によらざる限り、起らない。而して同樣に、經濟力の本態も亦減少せざるにあるから、經濟力それ自身は經濟理論的には人口過剰現象の原因とならない。

人口過剰の性質及其成因をかく經濟學的觀點に立つて精査すると、人口過剰はたゞ人口の增加があつてはじめて起るものと云ふことが出來るやうになる。たとへ支配の中にある富の總量が減少せず、等しい量のまゝで居ても或は增加しても、人口が增加し、或は其增加が前者のよりも速かであるならば、富の總量は相對的には減少したことになり、人口成員個々に分配され、以て實際に生活程度を維持する爲に用ゐられる富の平均量は絶對的にも減少するからである。この場合の人口過剰は人口の增加のみが原因であつた。而して經濟學ではこの場合だけが所謂人口過剰理論の素材として考へられ得る餘地があるだけである。富の總量の減少即ち經濟力の退化による人口過剰は可能なる又屢々實現した事實として經濟史の問題ではあるが、積極的に理論の問題となることからは除かれる。

合理的には經濟行爲は國民經濟に於て經濟力の退化に結果しないからして經濟力の退化を原因としては人口過剰が起らないことが理論的であるのにもかゝわらず、人口の增加を原因としてならば起るかも知れないと考へられるとすれば、經濟力の增減と人口の增減との間に、經濟學的に考へて根本的な相違がある爲であらねばならぬ。經濟力は最大の餘剰經濟價値獲得を目標として意識的に行はれる經濟行爲の國民的有機的組織體たる國民經濟における目標成就の可能の程度を意味し、意志を原因とする純文化所産であり、從つて勿論純經濟學的概念に屬し、わずかに第二義的條件として時代と環境との形式の下に現はれるのみであるが、人口の多少はそれ自身數の觀念であり、其數を決定するところの增減なるものは根本的に生物學的現象であつて、更にこの現象の原因に遡ればこの根本的には自然所産たるものの上に第二義的條件として文化的反省が作用するのみである。ある時代ある環境の下に經濟學的事實たる經濟力が一定の量において實現されることと、人口が自然事實たる人口增減によつて同樣に一定の數に實現されることゝの間に、交互に因果となるが如き普遍的關係は認められない（註一）。加之、生物學は一般の生物が陶汰の、從つて進化の要件として現實に生存可能よりもより夥しき生殖を遂げつゝあること或はその能力を持つことを敎へる。この生物界に一般的な事實を、人類の性慾及生殖力の自然科學的測定が疑ひもなくそれを容認するやうに、人類に推して考へるならば、人口の增減は單に消極的に經濟學的事實でもなく又經濟學的事實たる經濟力と關係なしに行はれるばかりか、人口は經濟力以上に速かに增加する恒常的傾向を持つて增加すると云はれるやうになる。人口の生存を現實に可能ならしめる經濟力は一の歷史的事實として常に發展或は進化しながらも、其各々の時點においては一定度の能力として考へられるから、かく條件付けられたる現實の經濟力に對して人口は超現實的增加を結果するであらう程强大な生殖を、生物學的可能として、恒常に行ひ得る結果、恒常の超現實的超生存可能的なる概念を經濟力だけと比較して考へると、常識的には、殆んど無限大であるかの如く視られるであらう。半飢の生活を辛うじて維持するだけの所得をしか得ることの出來ない經濟行爲を行ひつゝある人口と富裕なる生活に充分だけの所得を得つゝある人口との間に、文明人と野蠻人との間に、集約農地方人口と粗笨農地方人口との間に、通常見出される生殖力の比較の結果（註二）は、經濟力と生殖力との正比例的關係を肯定せしめない。少くとも人口增加は

經濟力に無關係に起り得る。故に經濟力の退化によつては人口過剰が起り得ないとの結論を生んだ今迄の論程では、それが然しながら人口の增加によつては起り得ると考へることの餘地を殘す。

（註一）英國の Sadler (The Law of Population, 1830) Doubleday (The True Law of Population, Shown to Be Connected with the Food of the People, 1841) を先驅とし Spencer (The Theory of Population Defined from the General Law of Animal Fertility, Westm. Review, April, 1852; Etc.) によつてよりよく記憶せられるに到つた、生物學的實驗に基いて唱へられる人口增加に關する學說は、生活程度の向上と生殖力とに反比例的因果關係あることを主張する。これが事實とすれば生活程度の向上を來らすであらうところの文明の進步は增々人口增加を緩漫ならしめるから、人口過剰の事實は將來に向つて益々不可能となるであらう。然しながらかゝる說は今日專門家によつては省みられて居ない (Wolf: Der Geburtenrückgang, Jena 1912, S. 29. Kautzky: Einfluss der Volksmehrung auf den Fortschritt der Gesellschaft, Wien 1880, S. 108-110)。其實驗に於て見られるやうな結果を以て同一民族の僅々數旬年をしか出ない期間の出產率變動を說明せんとすることはあまりに突飛と考へられる。

（註二）かゝる反對の社會的條件の下にある人口相互の間に生殖力の相違なく、もし生活資料にして制限なくんば人口は同じやうに增加するであらうことを論證する爲にこそ、マルサスは其人口論第二版以後の第二編第三編の史實を蒐集したのであつた。

恒に人口が經濟力を超えて增加しやうとし、即ち其ある部分が扶養を受けることが出來ない結果に陷るほどに增加しやうとすることがあり得るのは、人口は其增加に隨つて如何なる數をでも任意に自働的に扶養することが出來ない爲である。人口は人口それ自身によつて扶養されない、經濟力によつて扶養される。而して經濟力は人口の增加と共に正比例して增加しない。その自由なる發展が妨げられるのは現實の經濟力が歷史的所產として時代及環境とに關係して持つ一定度の有限な能力である爲である。人口數は勞働の量として經濟力の一要件である。從つてそれがその增加に隨つて經濟力を增加せしめるにはそれ以外の諸要件の必要だけの變化が伴はなければならない。一つの口毎に二本の手が供はつて居るが（註）、二本を以てしても手だけでは一つの口を必ずしも養ふことが出來るとは云へない。あらゆる經濟に於て、其種類規模技術組織の如何によつて、必要とせられる勞働量としての人口數の最適量は一定し、他の諸件はそのまゝで其適量に超過した勞働の供給としての人口增加ある時は、勞働各單位が受ける所得は最適量の時に於けるより小となり、超過が甚しければそれだけ益々より小となる。これ原始的には收穫（或は土地收益）遞減（或は漸減）の法則と呼はれ來り、後慧眼なる Carver によつて土地以外の一般の生產要素に關せしめられ生產要素均整の觀念にまで發展したるもの（The Distribution of Wealth, New York 1908, p. 53 ff.）の久しく說明して來た所である。然り、その云ふ所は人間の意志の作用から分離して考へられた自然科學的事實については正しい。これが農業化學においてリービッヒ（Justus von Liebig: Die organische Chemie in ihrer Anwendung auf Agrikultur und Physiologie. 1840 年初刊）によつて Gesetz des Minimus として確められたに見てもその自然科學的の正しさは益々確實である（Esslen: Das Gesetz des abnehmenden Bodenertrages seit Justus von Liebig, München 1905, S. 3. Diehl: Theoret. Nationalökonomie, Bd. II, Jena 1924, S. 77-79. Esslen: Das Gesetz des abnehmenden Bodenertrages. Positive Darstellung. Arch. S. S., Bd. 32, 1911, S. 382）。もしもこの法則にして全然なかつたとするならば一頃の圖を以てよく全國民を養ふに充分な食料を有利に產出するやうに利用されたであらう（大塚金之助敎授譯

マーシャル經濟學原理、分冊第二冊一七二頁）。人口は經濟力に無關係に且つこれを超過して增加する恒常の生物學的傾向を持ち、而して人口がもし一たびかく經濟力に無關係に增加（或は減少してさへも）すればそれが必然的に收穫遞減法則の作用を促し、其結果として人口成員個々に割當てて計算した富の平均量の減少が不可避であること確實であるからには、人口過剰が起り得べき事實たること又今までにも起つて來たことは承認される。

（註）英國の古諺に言ふ "With every mouth God sends a pair of hands."

過剰人口論の不可能

人口增加を原因とする人口過剰が事實として起ることの當然なのは如斯である。然し事實として起るだけなら經濟力の惡化を原因とする人口過剰さへ同樣であつた。問題は、それは果して、正統派經濟學を中心として經濟學界の大部分の論斷であるやうに、經濟學の對象としての人口の本質であつて、經濟行爲を營める人口が到達すべき必然的方向であるのか。前段論じたところによつて見えるやうに、もし一たび人口が其生存の可能と無關係にたゞ生殖力のあるがまゝに增加してこれに何等人工的調制を加へないことが假定されてしまへば其後の結果については議論の餘地がない。この假定さへ承認されてしまへば收穫遞減法則は歷然たる經濟法則たること勿論であり、この事と同じやうに其れによつて起る人口過剰は人口に經濟學的本質たること必然である。生活程度の保持と生殖による人口增加の遂行と、この二つが相反する時に人類はその經濟的考慮をも含ませた日常生活の爲の判斷に於て何れを選ぶか。以上の假定が事實可能であるには、かゝる場合人類が常に生活程度の保持が不可能となるのを顧みずに生殖によつて人口增加を遂行することを選ぶに相違なければならない。これは、少くとも經濟的考慮が働く場合の人間には、明にあり得べからざる選擇である。人間は、通例、自らの生活の危險を冒して生殖を企てることを鳥獸昆蟲のやうに容易に行はない。そしてたとへ、あまり屢々あるやうに、この抑制を破つて生殖が行はれても、人間はこの生殖が今度は人口增加に結果しないやうに調制を加へ、以て自然が生物學的法則によつて生物學的過剰分を消去するの不足を任意に補つて、人口增加に對する調制の範圍の限界を人爲的につくる。

一頃の圖を以て全國民を養ふことは絕對に不可能であるとは云へないであらう。然しそれは經濟學的不可能であつた。豫想外な不利を忍ぶことなくして行はれない。この不利は收穫の遞減から結果する。收穫の遞減を虞れ、これを避けんが爲に、人類はより廣い耕地を求めてエデンの園を出て東西南北に移民し、移民することによつて收穫の遞減を避けることに成功した。歷史的に世界の耕地面積が增加しつゝあるの大勢的事實と同じやうに確實なのは、これを裏付け說明する次の事實――經濟生活を營みつゝある一般の常人の中には、かゝる經濟技術上の計算を知悉してなほ所得の減少を介意せず、狹小のまゝの耕地を、當然收穫の遞減せしめるであらうところの方法で利用しつゞけたもののなかつたことである。一定の經濟的進少の階段の上にあつて一定量の人口が一定の生活程度の下に生活して居る狀態から出發して、現在或はそれ以上の生活程度を維持するに充分な經濟力の增加の見込がつかないのに生物學的原因の働くがまゝに生殖し增加を行ふことによつて新に生活程度を低くすることは、野蠻人にも文明人にも等しく常に恐れられ避けられて來た。人類は其

壓倒的な性慾の滿足と其當然たる結果たる人口增加を可能ならしめる爲に移民し掠奪し發見し發明し改良するのが習慣であつた。

性慾を原因とし生殖機能を道程とするが故に人類に常在的な壓倒的人口增加の自然現象的傾向は結局は其人口の生活程度を脅し其生存をも脅す運命を持つ。性慾と自己保存慾とは結局に於て衝突する。私は生物の持つ最も根本的な二つのこの本能の中で何れが强力に働くかを討議するの勞を省いて、少くとも、其研究の對象としての人生の一斷面を經濟生活にとる經濟學に於ては、自己保存慾はより多く追求せられると云ふことが正しいのを感ずる。經濟生活に於ける經濟人の努力は生活維持否それよりはむしろ生活程度向上、厚生增進に向けられてある。勿論、性慾と自己保存慾は必ずしも常に衝突するとは限らない。自己保存慾の滿たされた結果である生活、殊によき生活は、最も當然に性慾の滿足をも含み、最も普通な場合に於て兩者が滿足されながら生活が存續するからである。然しそれらは結局に於ては衝突する。そして經濟生活に於ける厚生增進が人口增加によつて脅かされる場合にはその成行を放任することなく生活維持の爲に人口增加を妨害し進んでは性慾の抑壓――人口增加妨害の手段には性慾の抑壓より容易な多くのものが實行せられて來てある――さへも行はれる。

人口增加の常在的傾向は一の自然現象である。それは感官と生殖腺の刺戟による生理的興奮と二個の異性生殖細胞の結合と營養と時間とを根本要件とする。最下等動物に於けるが如く人間に於て、又、理論的には、人體の中に於ての如く實驗器具の中に於ても同じことが可能である筈の因果律の表はれである。この自然現象から生物學が生れる、然し經濟學は生れない。經濟學は自然學ではないのだ。經濟學は經濟行爲を內容とする經濟生活があつてはじめて生れる。經濟行爲又は經濟生活は消極的な一條件であるに過ぎない。自然現象はそれを成立せしめる上の條件であるけれど單に持つが、行爲又は生活は意識的直接純粹の關係の上に特殊的に成立し全體價値を持つ。經濟生活は評價生活でありしかも豫算生活（計畫生活）である。自然現象に於て自然法則が支配するやうに經濟生活には自由意志が支配する。而して評價し豫算し計畫する自由意志がそのこれらを行ふに當つて持つ目標は文化價値の一相對的要素としての經濟價値の獲得、即ち欲望の物質的滿足である。生活程度の維持向上である。經濟生活とはこの目標に向つての判斷計畫の努力の繼續を云ひ、ある狀態にあらずして、絕對意志を原因とし絕對極限價値を目的とする絕對的跳躍の姿である。經濟學はかゝる努力及跳躍の行程に於て起る諸現象の性質及關係を說明し生活批判にある基礎を置かんとする。これ經濟學が自然諸科學と對立して意志科學、自由科學、文化科學、生活科學の一つに數へられる所以である。

自然現象が生活に不利を來らす時、これに反抗して不利を防がんことを企て欲する處に生活の特質があり、生活が其目標に向つて合理的であることの可能性がある。雨が降る。この自然現象から來るある不利を除く爲にわれ〳〵は家を建て雨具を用ゐる。雨が降らぬ。この自然現象から來るある不利（干魃時に於ける農作の受けるが如き）を除かんと欲して祭典を造り迷信を生み又は科學的研

究を企てる。かゝる時に自然現象を放任して生活の與へられた不利を顧みないことは消極的に生活を否定することで、生活を否定する生活は生活ではない。かゝる特質を備へた意志科學、自由科學、文化科學、生活科學はある時、自然科學が黑と斷定する事實について白と斷定するのである。氣象學的に降つた雨が必ずしも又經濟學にも降るとは限らない。人口增加なる「壓倒的」と云はれて來て居る自然的傾向が同じやうに生活に不利を來らす時、水上に棲んで暑熱を避け猛獸の來襲を防ぎ、丘陵に棲んで洪水を免れ、獨木舟を造つて水利を利用し、神祇を發明して人生に解決を試み、迷信と社會制度を生み出して秩序を保持せんと考へて來た歷史を有する程の人類が、あらゆる考慮を費して何等かの方法でこれを防かんことを企て欲しなかつた筈がない。そして單にこれを企て欲したばかりでなくこれに或程度まで常に成功して來たに相違ない。もしもかゝる企てや成功の方が例外で無關心や失敗の方が常例であつたのだとするならば、人類の歷史は退化の歷史、生活程度下向の歷史であつたに相違なく、これほど明かに眼前の事實と人類の經驗と信仰と智識とに反した斷定は考へられないであらう。

殆んど全ての人口論者の考への中にある、人口增加があつて後に耕地が擴張され或は技術や產業進化があつたと云ふ歷史觀は天動說と同じやうに因果を顚倒したものである。それは生活する人が先づ現れて後に生活程度を維持する物資の供給の生じたことであり、生活のない先に人口の存在を肯定する暴論である。しかも新に增加した人口は十數年を經なければ自ら生活を行ふ能力を持たない。否、不思議にも、彼等がより明瞭に云ふやうに食料のある以前に人口はあり得ないのだ。

人口增加の原因である性慾と生殖機能とは生活程度維持向上慾と同じやうに一般常人にあつて、常に滿足を求め或は遂行し作用するが、それが人口增加の結果に實現するには、今まで以上に增加した人口について生活程度の維持向上を可能ならしめるだけの所得增加を來らすやうな經濟條件の改善が必要であり、これあるによつてはじめて人口は增加しこれなければ人口の增加はない。何故ならばかゝる改善なき時も、性慾は其滿足を遂行し生殖機能は其作用を行つて人口は增加するに到るであらうけれども、かくて起るべき生活程度の必然的下向を恐れて生兒壓殺、墮胎を行ひ、或は生殖機能に一時的或は永久的傷害或は妨害を加へたこと、或は性慾の滿足そのものを抑壓し晩婚、制交、禁交、獨身（殊に前者）の風を作つたことは、或は意識的に或は無意識的に法律となり習俗となり信仰となつて、今日文明人の過去の歷史と未開人風俗誌とに明である。而してそのほかに、生活困難の爲に著しい數の老幼男女が死亡することを忘れてはならない。既に生活困難の爲に多數の死亡がつて更に性慾及生殖の人工的妨遏がある。何故であるか。人類がその經濟生活にある限り其終局的目標達成の爲に自己の本能的慾望の一つ或は其滿足の結果を否定することが最有利であることを知つて居るからである。人類は其生活條件を無視して生殖を行はない。其の生活程度が維持され向上される時だけに生殖が行はれ、從つて人口の增加が起る。そしてかゝる常例が人間生活の物質的關係を取扱ふ經濟學に於ける對象となる。故に經濟學に於て言はれ得ることは、人口は所得增加の割合或はそれ以下に增加するだけでそれ以上には增加しないことである。人口が所得增加の割合以上に增加することがあつたとするならばそれは如何に數多い例で有力に支持されやうとも、經

濟生活に於ける現象としては例外であり、悲しむべき目標喪失であり、失敗である。經濟學は其認識對象を對象圏外に求め、しかもそれを以て常例なるかの如く解し、これから抽象した概念を以て一般について本質的なものなるかの如く取扱ふの誤りに陷つてはならない。

經濟生活が其動機たる最大餘剰價値獲得を忘却せずに行はれる限り、又遂行を最も多く可能ならしめる方法が守られる限り、それは餘剰價値獲得の遂行に終るより外はないであらう。經濟學はこの動機によつてはじまり其の目標に向つて動く人間の行動及計畫に關係する精神的所産の性質及關係を其認識の對象とし、而してこゝに人間とは個々の人間或はそれの雜然たる集合でなく、社會的結合觀念としてむしろ人口と云はるべきである。經濟學の對象として考へられ場合の人口は經濟生活を合理的に營むが故に打算の事實上の主體たる個々人に最大餘剰價値獲得が可能たるべき筈であり況んやこれを妨げるに到るであらうやうな人口の過增を防ぐことに努めるであらう。人口が過剰とならない努力があるが故に經濟學は生れることが出來たとも云へ、人口過剰防止法を敎へる學問だとも云ふことが出來る。人口が本質的には過剰にならないから之を經濟學は人口をして經濟生活の主體たることを許し、この經濟生活を研究の題目とするのである。

人口は本質として決して過度の增加をもなさないし從つてかゝる傾向をも持たない。故に經濟學が人口を以て過剰ならんとする傾向を常に持つが如くに論斷するのは誤りであり、其認識對象の中心的なものに對する反經濟學的追放命令なりと解すれば經濟學の自己破壞であり自瀆である。其の常に持つ傾向を云々せんとするならば、むしろ其反對に、人口は過剰ならざらんとする傾向を常に持つと云ふべきである。人口は自ら調節して適度たらんとするの傾向を常に持つ。過剰たらんとする傾向が人口の本質であると云ふ意味の人口過剰論は經濟學に於ては不可能である。それは背理として消極的に說明され理論づけられるにすぎない。

最後にマルサスの說の批評を附記する。

マルサスの其人口論に於ける主要な問題は、後世考へられて來たやうに、人口が過剰になる傾向を本質的に持つと云ふ人口の本質論にあつたのではなく、福利を得る途としての經濟を知らずして衆の福利を增進し、生活程度低下防止の消極策よりはむしろその向上の積極策を講ずるの道を敎へ、生活し政治するが爲に生活難を訴へ困惑しつゝありし國民に向つて、合理的な經濟生活によつて大其爲に人口が避くべからざる中心論點にあつた爲に偶々これについて長廣舌を振つたに過ぎない。彼は經濟と人口增加とを別種の方法を以て取被つた。これ彼の著書の中に見える文化科學的方法と自然科學的方法とである。其前者を以て彼は先づ生活資料の增加を測定し、各國の歷史見聞を叙し、道道的抑制を勸告し、時論時務を批評した。其方法正しかりしが故に其論ずる處概正鴻を得、當時及後代の政策人心に及ぼした功績顯著であつた。其後者を以て彼は前者の論旨の原理たる人口增加を生物學的現象なる如く取扱ひ、生活資料と大なる溝渠を以て境するものとして根本論を立てた。其結果が根本論に於ける依然として初版的な文化否定的歷史理論となり定命論となり、爾餘の所論と一大矛盾を來した。彼の失敗であつたこの自然科學的考察方法の暗示を彼は Benjamin Franklin (Miscellaneous Works) 及 Robert Wallace (A Dissertation on the Numbers of Mankind in Ancient

and Modern Times, 1753.）の自然科學的研究から得たらしい。これをあまり素樸に社會事實に推し當てた處に彼の經濟學者としての失敗があり、序にかれの人口論を機緣として有力となつた經濟學に於ける自然科學的寄留諸學說の病源がある。自然科學から得たものは自然科學へ。彼が自然科學的事實の取扱に失敗した彼のその經濟書を讀んで等しく得た暗示によつてダーウインと、そして姓まで同じのウォレス（Alfred Russell Wallace）とがそれに基いた研究によつて自然科學に却つて正しい劃時代的な貢獻をなしたことは宿命の如く又奇緣であると云はねばならない。（昭和二年七月）

von Thünen に於ける遊離的數學的方法に就て

寺尾琢磨

（一）

J. H. von Thünen は其の大著「孤立國」（Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft u. Nationalökonomie.）の第一部第二版の序文の中に、自己の研究方法をば該書全體を通じての最重要なるものと斷言してゐる（Ibid. S. 4. Waentig 版に據る）。そして此の事は幾多の Thünen 研究者の均しく是認する所なるが如くである。然るに吾人に取つて訝かしく思はるゝ事は、斯くの如き重要なる問題に就て多數經濟學者の間に相互に全く相容れざるが如き解釋の行はれつゝある事である。例へば Ingram（History of Pol. Econ. p. 182.）Roscher（Geschichte der N. Ö. in Deutschland, S. 896.）Lifschitz（Die Methodik der Wirtschaftswissenschaft bei J. H. von Thünen.）及び其他 Brentano, Oncken, Dühring, Conrad, Cohn 等は彼の方法を抽象的、遊離的（isolierende）、演繹的、數學的と稱し、之に對して Ehrenberg（Thünen Archiv.）, Passow（Die Methode der nationalökonomischen Forschungen J. H. von Thünen.）の如き有力なる Thünen 研究者は該方法を記述的、歸納的等の言葉を以て表はして居るのである。